

## クルグズ共和国北部における個人の 家畜飼育ネットワークと地域的特性

— アトバシ地区アクムズ村 A 家族を事例に —

梶 浦 岳

ソ連崩壊後のクルグズ共和国では、家畜の個人所有にともない、家畜の飼育が盛んになっている。元来、クルグズ人は純粋な遊牧民とは異なり、農業も含めた牧畜を展開してきた。ソ連時代を経て、市場経済の流れの中で家畜をどのように飼育するのか、本発表では『*Mountain Atlas of Kyrgyzstan*』<sup>(1)</sup>から、クルグズ共和国内の自然・社会的条件の地域的特性を抽出し、これらを考慮した上で、個人の家畜飼育ネットワークの特徴を取り上げて考察をした。

クルグズ共和国は、歴史・地理的理由から、南北に分けられ、北部にはチュイ州、タラス州、ウスックグル州、ナルン州の4つの州からなり、本発表の事例地域はナルン州に位置する。この州では、アクサイ、アルパ、チャトルグルなど、広大な面積の放牧地をもち、村の最低標高は2,000m以上に立地し、4州の中で最も標高が高い。特徴としては、農牧業従事者が多いが、全体的に耕作に適した土地は少ない。一方で、標高の高い放牧に適した土地が多く、人々の家畜飼育への関心は高く、ナルン州アトバシ地区産の家畜は味が良いといわれている。夏の主な放牧地は遠距離の移動をするため、放牧庄は比較的低い。

次に、調査地を概観する。ナルン州の最南部に位置するアトバシ地区のアクムズ村は、中心地であるアトバシ町から東へ約30km、標高約2,400mにある。人口は3,618人、768世帯が住んでいる(2007年)。主な産業は農牧業で、ソ連時代に引かれた水路を使って灌漑を行い、小麦、大麦、燕麦、エスパルセ(家畜飼料)、ジャガイモなどを耕作している。村の南にはアトバシ川が流れ、そのさらに南には4,000m級のアトバシ山脈が東西に走っている。調査期間は2007年7月、9月に参与観察と聞き取り調査を行った。

<sup>(1)</sup> M.Schuler, P. Dessemontet, L. Torgashova, T. Abubakirova, M. Minbaev (2004): *Mountain Atlas of Kyrgyzstan*. NSC Bishkek-EPF Lausanne, Kyrgyz-Swiss Statistical Cooperation.

本発表では、A家族の生活における家畜飼育を事例として、農業と牧畜業の両面から、その特徴を考察した。調査対象のA家族は両親と息子3人、娘3人の計8人で、そのうち、アクムズ村に居住するのは長男家族、三男家族、三女の娘である。長男は農業、3男は放牧を含めた家畜飼育という役割となっており、父親は農地と家畜飼育全般を担当している。まずは農業から見ていく。農地は村周辺部に4か所(5 ha、3 ha、2 ha、1 ha)、合計11ヘクタールを利用しているので、これら農地は土地税を支払う一方、土地売買の権利を有している。2007年は、5ヘクタールの土地にエスパルセを70アール栽培し、そして残りの4.3ヘクタールと、他の1ヘクタールの土地から自然に生えた草(*kök chop*: 青い草)を刈り取った。さらに、2ヘクタールには全てエスパルセを栽培した。残りの3ヘクタールの土地は石の多い場所なので、使用していない。そして、これら11ヘクタールの他に、2ヘクタール分の、燕麦を栽培している人から刈取り権を買った。これらは全て乾燥させて冬季用の飼料とした。

次に牧畜業を見る。A家族は1993年からサライ(家畜飼育施設)を7つの家族で共同利用してきた。コルホーズから分配された家畜をもとに家畜を増やし、2001年にサライを増築してから本格的に家畜飼育をしてきた。2007年の6～9月中旬までA家族の家畜の一部は家父長の妻の9番目の弟家族へ預けた。この弟家族の夏営地は、村より約50km東の標高3,000mを越えるジャングジェルと呼ばれる場所にある。夏の間、村に残す家畜は、種雄の羊と山羊、乳牛、乗馬用の雄馬であり、預けるのは羊、山羊、雄牛、雌馬である。羊と山羊は現金を介して預け、牛と馬は乳製品を提供するので、現金を介さない。A家族の家畜で計画的な種付けをしているのは羊と山羊のみで、他の家畜は群れの中に1頭の雄を混ぜて、自然に交配させている。A家族では、雄羊、雄山羊、雌牛は6～9月の夏季期間、家父長宅の畜舎で飼育し、放牧は村に住む親族にゲズウ(*gezüü*)と呼ばれる持ち回り放牧で預けるか、弟が放牧をする。これらの放牧は、9～11月は村周辺部の刈取り跡地を約7kmの範囲で、12～5月の冬季期間はサライ周辺部の約3kmの範囲で日帰り放牧をしている。冬季は、村周辺部で50cmほどの積雪量があるため、牛は舎飼いで、羊と馬のみを放牧する。羊の放牧は日の当たる斜面を選択し牧夫が先導するが、馬の放牧は放し飼いとする比較的自由的な日帰り放牧としている。

最後にまとめると、A家族の農業は、家畜飼料のために行われており、牧畜業は通年の村周辺部での放牧には直接従事するものの、夏の遠隔地での放牧は、家畜の一部を親族へ預ける放牧となっている。家畜の飼育が盛んになる一方で、放牧という仕事の専門化が進んでいる。近年、サライを使用する家族が減ってきており、現在、3つの家族が使用し、年間使用しているのはA家族のみとなった。A家族は、サライを共同利用している他の親族から、

サライを買い取ることで、全ての畜舎を使用しないかと問われている。家畜からの現金収入は彼らの生活を支えており、アコムズ村からアトバシ町の家畜バザールまでは距離が約30km、車で1時間ほどの距離であるため、家畜が肥えた秋から冬の間、毎週土曜日に開かれる家畜バザールへ頻繁に通う。このように、家畜バザールへのアクセスの容易なことからも、家畜の生体売却は積極的に行われている。しかし、乳製品の売買に関しては露骨に嫌がる人々が多い。このような反応はウスックグル州などでは非常に薄く、商売に関する意識は州によって、もしくは地区によって地域的特性があるといえ、その要因としては、今後の研究の課題とする。

(立正大学大学院博士後期課程)

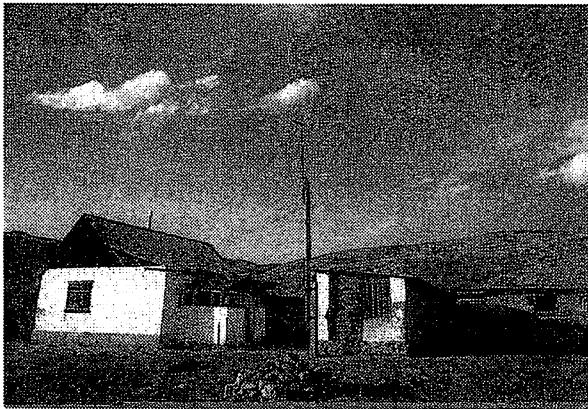


写真1 A家族のサライ(家畜飼育施設)



写真2 標高3,000 mを越す夏営地